

Title	妊産婦の我が子に対する愛着発達に影響を及ぼす要因：一事例の日記からの考察
Sub Title	The factors affecting a woman's development of the attachment to her fetus/newborn : a descriptive analysis based on a diary of one case
Author	柴原, 宜幸 (Shibahara, Yoshiyuki)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1991
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.31 (1991.) ,p.159- 168
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000031-0159

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

妊産婦の我が子に対する愛着発達に影響を及ぼす要因

——事例の日記からの考察——

The Factors Affecting a Woman's Development of the Attachment to Her Fetus/Newborn

A Descriptive Analysis Based on a Diary of One Case

柴原 宜幸
Yoshiyuki Shibahara

The purpose of this study was to discuss a woman's development of the attachment to her fetus/newborn. Her diary was adopted as a primary instrument. Although it has been thought that a study based on a diary has had many difficult problems, some significant probable factors were identified.

The results of this study especially emphasized the role of a husband/father in the mother's attachment to her child. That is, this case had some difficulties with the relationship to her husband, and the evidence of development of attachment was not, on the whole, recognized from her diary. Therefore it was thought that her inadequate psychological environment decreased the descriptions of the attachment to her child.

This case, however, showed the tendency of the attachment to her child in hospital. This fact may offer a chance to transform her psychological state in this period.

From this study, it is too premature to conclude that all mothers' psychological issues entirely depend on their husbands. The accumulation of the further data is needed in this context.

筆者は先の論文(柴原, 1988)で、妊婦は妊娠後期において、妊娠事態やその後の育児に対して積極的に受容する傾向にあり、その傾向が出産を契機に、より顕著になることを示した。しかし研究デザインの性質上、皮相的理解に留まっており、また、どのような過程を経て受容傾向に至ったのか、更にその後の経過については、明確に示すことができなかった。そこで本研究は、妊産婦が妊娠・出産・育児の過程を通じて、如何に我が子への「愛着」を発達させていくのかを継続的に調べる目的で実施された。もちろん、産科学や発達心理学、臨床心理学、精神医学等からの研究が蓄積されつつあるのだが、これまでの諸研究の問題点としては、おおよそ方法論的問題に帰結するであろうが、筆者なりに次のように要約しておく。

- ① 「母性」概念の曖昧さ
- ② 研究対象の極度の単純化
- ③ 研究デザインにおける「輪切り」化

①については、筆者自身も模索中であり、ここでの中心課題ではないため触れないことにするが、不用意な用語使用は慎むべきである、と考える。その観点から、筆者自身は、現況下では「母性」という用語を一切使用しない。②について一例を挙げれば、妊産婦の不安を扱う場合、研究者側が不安を中心課題とするあまり、あまりにも様々な妊産婦の状況を、不安が原因であるかのように展開させている点を指摘したい。最後に、③に関してはある程度妥協せざるを得ないが、心理学的に特に変動の多い時期であるが故、調査時と調査時との間を回顧的情報を中心に埋めていくことには、少なからず問題ありと結論せざるを得ない。更に、小嶋(1988)は、親となる心の準備を説明する鍵概念として、「養護性」と「支援体制」を挙げているが、後者については、一方で社会的変数の重要性を示唆しながら、他方では、現状では十分に考慮されているとは言い難いことにも、言及しておかざるを得ないであろう。

上記の問題点を出発点に、筆者が採用したのが妊産婦の「日記」である。この方法論の利点としては、a) 多くの変数を同時に考察することができ、b) 調査時と調査時との間に生ずる変容と共に、個人的状況を密接に把握することが可能なことである。また、c) 質問紙票では強制的に回答させられる部分があるが、日記では、その人個人にとってインパクトをもつ部分が自由に強調され、しかもある程度、因果関係にも言及し得るであろう、という点である。

当然のことながら、欠点も並存している。端的に言えば、一般化可能性とデータの信頼性の問題である。データの信頼性に関しての第一は、他人に見せることによる記述内容の歪曲であり、今一つは研究目的の認識による、記述対象におけるバイアスである。加えて、心理的反応の強度に対する情報不足も考えられる。研究者個人の解釈の歪曲の危機は当然のことながら、たとえ依頼の上であっても、日記を書くという行動をとる人格特性(小嶋, 1986)にも、厳重に留意しなければならない。しかしこのような欠点にも拘らず、従来の産科学的な妊娠段階に加えて、心理学的妊娠段階、更には「事」系列的な観点を導入し得ることからも、本研究は、「探索的」意義を十分に提供し得るものと思われる。ただ、本論においては「我が子に対する愛着」の指標として、胎児や新生児及び乳児に関する記述(とりわけ情緒的反応を伴った記述)を採用しているが、そのこと自体の問題点は少なからずであろう。その点については、後述する。

方 法

被調査者 福岡県在住の経産妊婦1名による日記を対象にした。被調査者についての基礎的資料は、表1に示した。²⁾ 本研究の被調査者は、筆者の友人関係を経て得たものであるが、その点のバイアスは、日記内容からみる限り問題ないと思われる。³⁾ 調査(日記)開始は妊娠12週の時点であり、出産後63日までの協力が得られた。しかしその後の研究協力については、被調査者の、主に育児労働を起因とした負担により、断念せざるを得なかった。

調査方法 研究協力依頼としては、単に、「妊産婦についての心理学的研究です。日記を書いて下さい」以外には何も与えられなかった。ただ上述の、研究目的の認識によるバイアスについては、客観的には克服し得ていない。⁴⁾ 日記の入手方法は、3~4ヶ月毎に郵送してもらいコピー後返却する、というものであった。他の補助的な調査内容として、自由記述を中心とした質問紙票(主に

表1 基礎的資料(調査開始時)

年 齢	30 歳(現夫と結婚後2年経過)	夫の年齢	28 歳
学 歴	高校卒業後、専門学校卒業	夫の学歴	大学卒業
結 婚 歴	前夫と離婚後、現夫と再婚	夫の結婚歴	初 婚
妊出産歴	出産1回(長女)中絶2回	夫の職業	教 師
職 業	無 職	長女の年齢	7 歳
家族構成	夫・長女(前夫との間)		

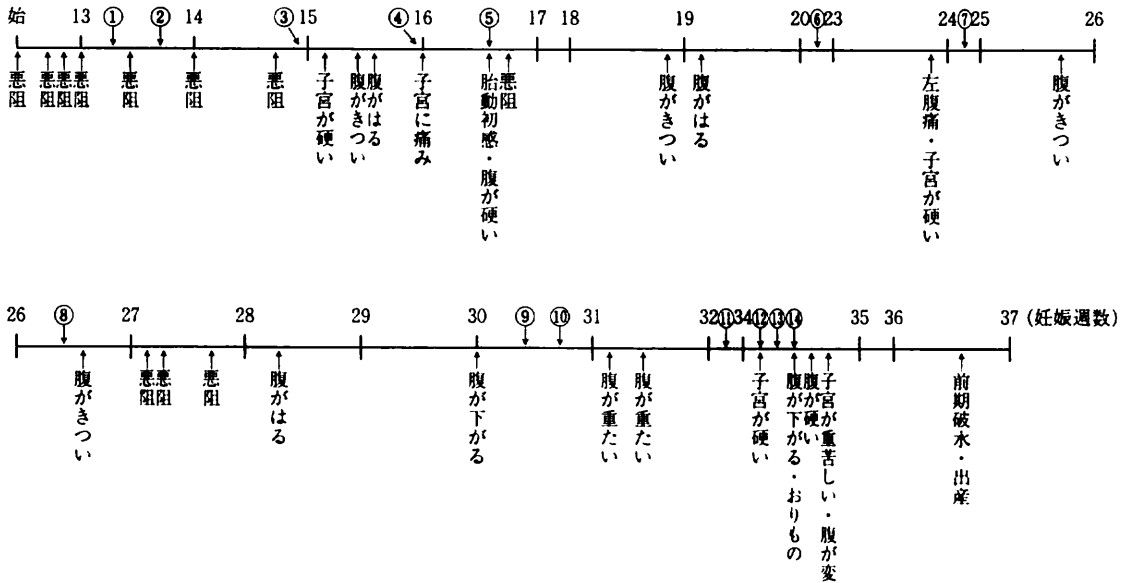
基礎的資料に関するもの)も採用した。質問紙票には、被調査者の出産退院直後に、郵送によって回答された。

結 果

妊娠過程 まず、身体的記述についてであるが、図1に記す通り、全く問題がなかったわけではない。とりわけ、心理・社会的問題との関連が指摘されている悪阻の出現頻度・時期には、注目しておく必要がある。図1に示されている以外の特記事項としては、妊娠期間全般にわたって腰や体のだるさを訴えており、また、妊娠32週あたりから足のむくみに対する記述が頻繁に見られる点が挙げられる。最終的には出産予定日より25日早く、前期破水で出産した。新生児の出生時体重は2,370gであったことも併せて記しておく。

次に、主だった生活事象についての記述を示す。とりわけ大きなインパクトを持ったと考えられる事象が2つある。1つは経済的問題であり、今1つは、妊娠23週後半に持ち上がった夫の転勤に伴う引越しの問題である。経済的問題は、妊娠17週の後半から18週にかけて、親戚から借金をするという事実によって特に顕在化したのであるが、妊娠17週6日には「子どもをおろしとけばこんなことにならなかった」と夫が発言する(直後に謝罪)に及んでいる。出産後の質問紙票にも、妊娠17週の頃墮胎を考えたことがある、と記されており、本妊婦にとってはこのことが重大な影響を与えたであろうことが推察できる。引越しの問題については、結局引越しには至らなかったものの、妊娠23週5日から25週2日まで毎日のように否定的感情(問題そのものに対する不安やそれについての夫の対応への不満)が吐露されていた。

最後に心理的記述についてであるが、特徴的なことを数点列挙することにする。第一に、夫に対する不満が一



注：図中の○付き数字は、表2の※に対応している。

図1 妊娠中の身体的記述

貫して記述されている点である。夫に対する情緒的反応の記述の頻度から見てみると、同じく同居者である長女に対するそれとは比較にならない程、圧倒的に多い。しかもこのような情緒的反応のうち、否定反応が肯定反応を大きく上回って出現している点は、特記に値する。また、4~6日全く口をきかずに過ごすという夫婦喧嘩が3度見られる。妊娠16週1日~17週0日、24週3日~24週6日、32週5日~33週2日である。しかし、「つき合って4年め、今回が初めての大ゲンカ」（妊娠16週5日）という記述が見られることから、妊娠以前から夫婦喧嘩が絶えないということではなかったようである。これらの喧嘩の原因は相互作用的であり、生活的諸事象や妊婦自身の体調や情緒の状態等の複雑な絡み合いの結果ではあるが、直接の引金となっているのは、日記内容の限りにおいては、夫の言動、とりわけ夫の遊興癖であった。

第二に、出産や妊娠継続に対する不安等、様々な不安を有している点である。大別すると、その対象は胎児、出産、妊娠状態、経済、家族生活等に及んでいる。しかし、出産不安一つ採ってみてもその原因は全て一様というわけではなく、自己の体調、知人の出産や産後の知らせ、知人の子供（特に乳児）を見たとき、妊産婦情報誌を購読した際、など多岐にわたっている。また、前述の

引越しの問題が持ち上がった時や分娩室を見学した際にも出産不安を訴えている。時系列的には、妊娠12週~16週・34週~35週に集中して見られる。

第三に、近隣との付き合いである。本被調査者の住居は団地であり、近隣の者の出入りが非常に多く、毎日一日中行き来が絶えないという状況である。そのような状況は、慢性的疲労の原因になっていたり、直接的不満を誘発させたりしている一方で、「ありがたい」（妊娠13週4日・18週5日・25週3日）、「幸福だと思わねば」（妊娠16週2日）、「誰かが来てくれるとほっとする」（妊娠29週3日）等の記述から推察することができるように、身体的・精神的支柱ともなっていたようである。

そして第四に、本研究の中核的目的である我が子（胎児）への愛着（情緒的反応を伴う記述）であるが、表2に示すように記述件数が14件であり、しかも情緒的反応がそれほど見られるわけではない。筆者の当初の予測は、妊娠の進行に伴って、胎児に関する情緒的記述が増してくるというものであったが、そのような傾向は全く見られず、むしろ妊娠初期以来、日記の記述には表れていない。但し、情緒的反応は伴わないものの、胎動に関する記述は妊娠30週及び34週に頻繁に見られる。

出産過程 出産後の入院期間中は、子育てといえども基本的には病院の管理下におかれているため、育児の過程

表 2 妊娠過程における胎児に対する記述

※	週	日	記述内容
①	13	2	…夢を見た。元気な赤ちゃんを生んでおんぶしている夢だった。(中略)…奇形児だったらお母さん達に申し訳ない。(中略)もしももしも奇形児が生まれたら、自業自得…
②	13	5	自分でもビックリ!!こんなにおいしいものだったとは…たぶんお腹の赤ちゃんが欲しがっているのだろう。
③	15	0	エコーでお腹を見たら、赤ちゃんの心臓が動くのがはっきり見えた。(中略)胴体も頭もちゃんとあるみたい。感激!!(中略)赤ちゃんの心臓が動いていたから生きているんだな…。
④	16	0	赤ちゃんの心音を初めて聞いたのであ～生きているんだ!と安心する。
⑤	16	4	…右腹を、なんと初めてトントントン…と4回赤ちゃんがけたような感じがした。いやこれはやはり赤ちゃんが動いたんだ!!
⑥	20	5	赤ちゃんもお腹の中でひさしぶり良く動く。
⑦	24	6	…私も胎教に良くないと思いつつ知らんぶり。
⑧	26	3	(産科受診後)子供は元気との由。
⑨	30	3	今日は朝からお腹の中がよく動く。
⑩	30	5	上の方(側)が動くので逆子がなおったのかな?
⑪	32	1	…私は、赤ちゃんのために扇風機を、クレジットだけどがんばって買った。
⑫	34	1	赤ちゃんの動きがなかったのが少し眠ったら、ようやく動く。
⑬	34	2	…赤ちゃんも動くよーになったけど今日はきつかった。
⑭	34	3	赤ちゃんはときどき動く

注: 表中の○付き数字は、図1中の○付き数字に対応している。

と同一線上に考えるべきではない(上田, 1981; 柴原, 1988)。その観点から、この期間の結果は独立に述べることにする。本被調査者の場合、未熟児出産の為、出生児の退院は産婦の退院後12日目(産後2週3日)であった。故に実際の育児過程は、出生児の退院から始まったと考えられる。

本被調査者は、前期破水で緊急入院後、約4時間の分娩時間を経て、夫立ち会いのもとと娘を出産した(最初から夫の立ち会いを希望していた訳ではなかったようである)。出産に際しての合併症はなかった。その後の産婦退院までの身体的記述については、一般的な傾向と合致しているものと思われる。即ち、産婦の入院中は筋肉痛、腰痛、尾骨痛、足のむくみ等の訴えはあるものの、特別な術後の処置を必要とするものではなかった。しかし、妊娠中と比して、自己の身体的症状に対する記述の割合が明らかに小さくなっていったことは、この期間の特徴として特筆されるべきである。

心理的状況については、かなり大きなインパクトが与

えられたと考えられる時期であった。その1つは、本事例の場合、夫にとっては第一子であるという事実認識の機会と、今1つは、薬(精神安定剤)服用⁹⁾による断乳処置である。また、未熟児出産による物理的母子分離体験も大きな影響力を有したであろう。加えて、社会的要因としては、夫の言動に対する不満が妊娠過程と同様に継続している点や、その一方で近隣者からの温かい援助を甘受できた点も、その後の母親としての或は一個人としての心理的状況に、影響を及ぼす要因となり得るものと考えられる。

第一に挙げた事項については、次の記述が如実に物語っている。“私がH(注:以下夫を表す)にそっくり…と云ったら、あとであまりY(注:以下長女を表す)の前でそういうこと云うな!としかられる。…Yに対して何らかの気持ちをHがもってるからじゃないのか…。…淋しい気持ちになった。(中略)消灯後、…涙ばかり出る”(産後0週2日)。この種の継父関係に言及する記述は、妊娠中の如何なる時期においても見られたものでな

表 3 出産過程における我が子に対する情緒的記述

週	日	記述内容
当日		…ボン…と云う音というか振動がなかったので、Hに赤ちゃんが死んだんじゃないよネとたずねる。 (出産) 産湯をつかった赤ちゃんに服を着せ私の顔の横につれてきた。「女の赤ちゃんですよ…。」私は「信じられない…。」の一言しか出なかった。でも無事、終わったのだとひと安心。あとはホケッと頭の中はカラッポ。(中略)私も子宮収縮でお腹がチクリチクリしたいけど我まん我まん、赤ちゃんが生まれたんだから。
0	1	途中赤ちゃんの顔を少しみてでんわした。(中略)5分ぐらい話して、又、少しだけ赤ちゃんの顔を見て…。(中略)お乳を止める注射…したあとに赤ちゃんに自分のおっぱいをすわせられないと思うと悲しくなってきた。かわいそうな赤ちゃん。(中略)…おちびさんに産んでしまっでごめんない…。(中略)玄関まで見送りしたあと、赤ちゃんの顔を見た。…表情はHにそっくりだ。口をうごかす所はもう…そっくり。(中略)…時計をあわせに行く。途中、赤ちゃんの顔をながめる。やはりHにそっくりだ。(中略)そのあと、いつか赤ちゃんをながめていた。…元気に育ってくれるといいのだけだ。
0	2	赤ちゃんを見に行った。眠ってばかりいて、泣き声をきいたことがない。ホントHの寝顔にそっくりだ。…いくらみてもあきがない。…お乳のはらない注射をその場でされた。あ〜かわいそうだ。お乳をすってもらいたいのにだめな母親だからお乳をのませられない。(中略)婦りを見送って、赤ちゃんの顔をまたのぞき…。(中略)…その婦りにまた赤ちゃんの顔をながめていたら、初めて、泣き出した。…赤ちゃんは目をあけて、色々な表情をしている。30分程ながめて…。(中略)…玄関まで見送り又、赤ちゃんの顔をのぞき込む。(中略)早く帰りたいけど、赤ちゃんと一緒に退院できないなら、このままここにいたい。
0	3	…赤ちゃんを部屋につれてきてくれたのだ。夜の9時まで私が面倒を見ていいという。退院まで抱けないとあきらめていたのに…。はじめてだっことして、なんとなくドキドキ。首が座っていないから、なんだかこわい…。でもうれしい。…腰はいたかったけど赤ちゃんの顔を覗いていると腰の痛さだるさを忘れてしまう。目をしっかりあけてキョロキョロ、まるで私を見ている様だ。(中略)…ぐいぐいと気持ちよくすいこんでくれた。うれし〜い。…ウトウトするので私のベッドの横にねかせた。これだったら、私も横になり、赤ちゃんの顔がじっくり見れるもんネ。…いつみてもあきがない。(中略)抱きぐせがついてしまうかもしれないけど、今のうちだもの。私より退院がおそくなってNsにしか抱っこしてもらえないものね。かわいそうだよネ。(中略)…少し眠ろう。赤ちゃんもおとなしく眠っているから。
0	4	…早く大きくな〜れ。…目もトロトロしてかわいい。(中略)少し泣くから、だっことしていたらスヤスヤと眠ってしまう。やっぱり私のお腹にいたから、安心するのかな?!(中略)…みんなのんでしまう。私もがんばれがんばれ…と心の中で云っていた。
0	5	お乳が少しはっていた。そんな時赤ちゃんの顔を想い出す。…今日で赤ちゃんとしぼらくお別れだ。まさかこんなふうな退院になるなんて考えてもみなかったことだ。なさけないと思う。(中略)「おはよう赤ちゃん」とご対面。…体重がいきにふえた。…うれしい。(中略)…眠ってしまう。やっぱり自分の赤ちゃんはかわいい。(中略)こうして腕の中で眠れるのはあと何日後か…。…あと少しでお別れだね。(中略)…赤ちゃんに別れをつける。車の中で赤ちゃんの顔を想い出し泣いてしまった。わが家についても想い出す。(中略)赤ちゃんの声が想い出され、又、泣いてしまう。
0	6	Hから Tel あり。出張所で届けを済ませたとの由。名前は「A」に決まる。
1	0	すぐ夕食をとり、7時Aちゃんをみんなで見に行った。昨日2人産まれていて、赤ちゃんをまちがえる。(中略)…久しぶりな感じで、…2日間見ない間に成長の早さにびっくりした。8時前には、お別れをしたがもうちょっとだいていたかった。★
1	2	夜、Aちゃんを見に行くつもりなので…
1	3	私はAちゃんに会いに行こうと準備していた。…元気がない。少しミルクをやらうとしたら、むせたので死ぬのじゃないかとハラハラした。…元気がないまま、9時近くになったので、うしろ髪をひかれる想いで帰って来た。心配でならなかった。★
1	4	8時すぎAちゃんに会いに行った。…でも今日はうれしいことにミルクも最高110ccのもんで、…昨日よりだいぶ元気よさそうで安心した。いつかだいてやったら、スヤスヤよく眠っていたので安心して帰って来た。★
2	0	昨日Aを見に行けなかったから、今日はみに行こうと思っていたら、Hが…機嫌悪くし、…、Aにも会いに行けなくなった。(中略)お乳をしぼるたびAを想い出す。ねつけなかった。
2	1	…Aに会いたくてNさんに Tel して車でつれていってもらったんだ。(中略)病院について、Aと対面。…体重がふえて安心した。土曜日頃退院できるといっていた。★

表 3 つづき

週	日	記 述 内 容
2	2	病院から Tel あり。明日退院できるとの由。…うれしいことだ。
2	3	…Hは…たぶん病院に一緒には行ってくれないだろう。…Aにとってなんて悲しいことやら…。 (A退院) …私がしっかりしなくちゃ。

注 1: ★印は、我が子に面会に行ったことを示す。

注 2: 表中のHは夫のことを、Aは本論が対象とする産児のことを示している（以下の表についても同様）。

いが故、改めて家族関係の位置付けを再確認させるものであったであろう。

第二・第三に挙げた事項については、表3に示す通り、産婦にとって自責の念や悲哀の感情を抱かせるものであったであろうことは容易に察しがつく。即ち、我が子に対する肯定反応と共に、同情的反応や母乳を与えることができない自分に対する否定反応が、露にされていたのである。また、産婦退院後の面会時の記述においては、我が子の状況を逐一詳細に把握できないことからくる不安定な精神状態が読み取れる。しかし、このような不安定な精神状態の原因としては、第四に挙げた夫婦間における葛藤が寄与している可能性もある。産婦退院後も、夫に対する不満は続いており、典型的には、産後2週0日～2週4日（出生児退院前）の、夫婦間で全く会話なし、といった不和の記述が見られる。

我が子への愛着については、本事例の場合、産婦入院中と退院後とを新たに分けて論じる必要がある。なぜなら、母子の退院日が異なっていたのも一因ではあるが、とりわけこの両期において、顕著な記述内容の質的相違が見られたからである。要約すると、入院中においては、新生児に対する記述がほぼ毎日見られ、しかも必ずといってよい程、何らかの情緒的反應、しかも肯定反応を伴っている点が特徴として指摘できるのである。この点については、妊娠過程中には散見できる程度のものであった。更に、機会ある毎に我が子を見たいという感情、見ようとしている行動が確認できる（表3）。もっともこれらの諸点については、現実に肉眼でその存在を捉えることができるようになった効果と、家事労働に追われる日々の生活とは異なる環境下であり、いわゆる雑用に振り回されることなく、欲求に従った行動をとれるという自由が提供されていることを考慮に入れる必要がある。このような、行動の自由度の高さは、産婦入院期間中の記述量が、他の時期と比して圧倒的に多いことから理解できる。ところが、同じ出産過程として範疇分けしたものの、産婦の退院後については、幾分様相が変わ

っている。もちろん、そこには物理的母子分離状態や日常生活への復帰といった要因が、記述対象の偏向に寄与しているとも思われるが、出産前の記述傾向に漸近してきている。即ち、先の夫に関する記述との関連から言及すれば、産婦入院中は、夫への不満は事実あるものの、中心的内容は我が子に対するものであったのが、産婦退院後は逆に、我が子に対する記述はあるものの、関心の核（主に不満）が夫へと移行しつつあったのである。

育児過程 育児過程中的身体的記述については、筆者が入手している他の日誌資料と同様の傾向を示している、と判断できる。略述すれば、主訴として睡眠不足が目につく点である。ところが、いわゆる床上げの時期については、産後2週1日、と一般的傾向よりかなり早いものと思われる。そしてこの決定は、産婦自身の判断からではなく、夫からの叱責（産後2週0日“2週間も寝れば産後の肥だちも何もない”）が発端である。そして、自己の身体についての不安はあるものの、その要求に従わざるを得なかったのが実状のようである。

一方の心理的記述については、妊娠過程同様、本事例の場合、全体として否定的なものであったと結論せざるを得ない。そしてその根底にあるのは、やはり妊娠過程同様、夫婦関係に関するものであった。そしてその原因は、育児そのものを介したのではなく、夫の生活態度（より具体的には、妊娠過程と同様に遊興癖）なのである。また、社会的状況としては、本事例の場合、実父母は他界しており（質問紙票より）、いわゆる里帰りというものはしていない。故に夫の祖母が手伝いの為に滞在していた（図2）。その点についての直接的な不満の記述は見られないものの、ストレス要因になり得ることは、充分に考えられる。具体的にその心理が記述されていたわけではないが、夫の祖母の在宅期間中の産後4週2日には、“やっぱり血がつながっているからネコっかわいがり”と記されており、出産過程で問題視した、異父姉妹関係に対する複雑な心理が顔を覗かせている。しかし、産後5週1日の記述には“ノイローゼにならないかとい

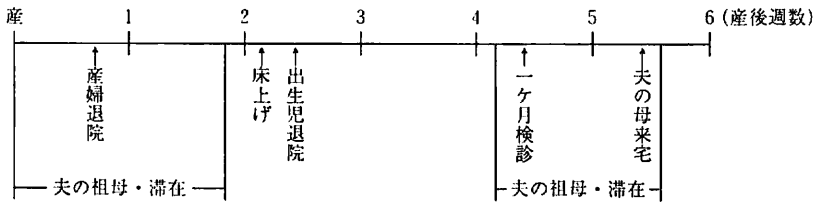


図 2 出産後の生活的記述

表 4 育児過程における我が子に対する情緒的記述

週	日	記述内容
2	4	いっときしたのでオムツをかえて、ちょっとだけお乳をすわせてみた。初めてすわせたがやっぱりお乳をすってもらおうと何とも云えずかわいい。でもお乳が出ないので…。(中略)あせもが体いっぱいできててかわいそう。
3	3	…けんさしたら、…尿路感染のための熱だったのだろうと云われた。あんしんしていっぺんにつかれた。(中略)退院して3日めに親をハラハラさせてとんだ一週間でした。でもよかった、何もなくて。
3	6	…Aを沐浴させた。…気持ちよさそう。
4	6	夕方Aをふろに入れる。…ミルクを…120cc ちゃんとのんでくれた。
5	6	夜中 12:30 と 4:00 ミルクでおこされた。今夜ゆっくり眠ってくれたら私もラクなのだが…。
6	4	…眠ったのが 2:30 頃。4:30 にもおこされ6時におきる。いいかげんすい眠不足だ。
8	4	ここどころAの目もしっかり見えている様子。あやすとニコッと笑ってくれる。じっと動きをみつめ、しっかり私の顔を見てくれる。夜も5時間ぐらいいは眠ってくれるので、だい分夜の授乳もラクになってきた。

まから心配する”とある。この心配は、夫の祖母の帰宅に際してのものであり、その意味では、本事例にとっては、夫の祖母の存在が身体的負担を軽減し、また、夫婦関係のクッションとなっていたのではないとも推察できる。

最後に、我が子に対する情緒的反応を伴う記述に關してであるが、記述件数は少なく、また表4からある程度の推定はできるように、積極的肯定から消極的肯定（否定反応を意味している訳ではない）への変容傾向を認めることができる。つまり、我が子の存在そのものに対する肯定反応から、産後8週4日の後半の記述のような、自分の生活との関わりにおける肯定反応へと質的に変化しているのである。もっとも、このような傾向は、我が子への記念品を意図したような、いわゆる育児日誌においてすら確認できるものである（現在分析中）。しかし、明らかに記述件数が少ないことは、筆者の予測に反するものであった。

考 察

羅列的に日記内容を概略化した結果を述べてきたが、

これらを統合的に整理し直し、「我が子への愛着」という観点から考察を加えることにする。

本調査は、Gloger-Tippelt (1986) が提唱するモデルの「適応期」に開始された。彼によると、「適応期」の順応を通して「焦点期」「予期と準備期」と、母親としての意識形成や胎児に対する愛着形成という課題が、積極的に処理されていくというのである。ではこのような傾向が、本事例の日記においてはなぜ明確に同定できなかったのであろうか。また出産後においても、愛着の発達を想起させる記述が、なぜ得られなかったのであろうか。本事例のみから直接的結論を導き出すことは不可能であるが、以下に述べる諸点をその可能性の一部として、また今後の研究課題として提出しておく。

本事例の場合、質問紙票から、今回の妊娠は計画したものであり、受胎認知の際、“うれしかった”という感情を有していたことがわかっている。また、胎動初感以前には、妊娠13週5日のような胎児を人格化した記述(表2参照)が既に見られていたことから判断できるように、妊娠や胎児に対して最初から否定的であったわけではない。しかし、重要なインパクトを持つと考えられ

ている胎動初感の喜びを、家族とりわけ夫と共有できなかったことは、その後の胎児への愛着の阻害因となった可能性が考えられる。また、そのような臨界期的解釈ではなくとも、胎動初感時における情緒の状態は、ある程度の重要性を有するものの、その後断続的に続く不和や経済的問題、引越しの問題等、家庭内の諸問題が愛着の発達のきっかけを阻害し続けた結果とも解釈できる。とりわけ経済的問題は、一時的な事態ではないが故、深刻な問題であろう。いずれにしても妊婦の心理的状況は、単なる妊婦自身の身体的・生理的状況に対する反応だけで説明できるものではなく、社会的環境因子、特に家庭の持つ影響力の重要性をも示唆するものであろう。そしてそのような負の影響ばかりではなく、近隣との関係が、本事例においては緩衝要因の1つとして機能していたことも事実である。また、本事例の場合、跡取りとして男の子を欲していた(質問紙票より)点や、自己の妊婦姿に対して否定的であった点(例えば、妊娠18週6日“あーみっともないこのお腹”:32週にも同様の記述あり)を鑑みると、大日向(1981)が指摘するような、妊娠に対する自我関与の度合いが稀薄であった可能性もある。ところで、花沢(1978)の初産婦を対象とした横断的質問紙調査によると、胎児に対する愛着は、妊娠前期・中期に比して後期には相対的に低下するという。研究対象や研究方法自体に相違はあるものの、ある意味で一致した結果を得たことにもなる。この点についても今後、併せて検討を重ねる必要がある。

では、妊娠30・34週に胎動に関する記述が頻繁に見られたことをどのように解釈すればいいのであろうか。妊娠30週の頃については、産科検診の際に逆子になっていることが判明した時期であり、胎児に焦点化されたと考えられる。そして、逆子がなおった後には、胎児に関する記述が見られなくなっている。妊娠34週辺りにおける情緒的反応の伴わない胎動の記述については、不安との関わりで考えることができよう。郷久(1986)のMASを用いた研究結果同様、本被調査者も妊娠前期と後期において、不安が高くなる傾向があった。体調不調の記述と呼応していることから、このような不安の表われではなかろうかと考えられる。

総じて、妊娠過程は、周期的な夫との不和や、経済的問題、引越しの問題、更に妊娠35週後半の夫の不在(修学旅行の付添い)等の、精神的ストレスとなる事態に満ちていた。妊娠中毒症や早期産との関連を探っていくことも、今後の課題である。

ところが出産過程前半(産婦退院まで)に至って、我

が子への愛着の発達を想起させる記述が日記内容の中核を占めるようになる。これは、当然時間的余裕が寄与してはいるであろうが、やはり出産の効果である、と考えることに異論はなかろう。本事例の場合、我が子に初めて触れたのが産後3日ではあるが、それ以前にも我が子に対する愛着(本論における情緒的記述)が発達しつつあることを日記内容から読み取ることができる。そして、夫への不満が継続していながらも、意識が我が子の方へ向いており、産婦にとってこの時期は、自己の身体や社会的関係は二の次であり、一義的に我が子に焦点化していることを推測させるものである。そしてこのような傾向は、初産婦を対象に質問紙票によって調査した柴原(1988)の結果を確認するものであった。もちろん、産婦に合併症がある場合は、異なる傾向が見い出されるのかも知れない。

出産過程後半(出生児退院まで)においては、結果の項で述べた通り、夫への焦点化(否定的感情)が再び生じている。しかし、日記の端々から推察できるが、直接的には、物理的母子分離の影響とは考えにくい。むしろ夫婦関係の葛藤が、愛着を示す記述の抑制を余儀なくしていたと考察できる。つまり、産婦の側には、毎日我が子に面会に行きたい、そして行く態勢は整っていたのであるが、夫婦関係の歪みからその願いが全面的には実現せず、逆に夫に関する否定的感情の高揚から、関心の対象がすり替えられてしまったものと思われる。表3に示すように、面会の実事(★印)の時系列的な経過が、そのことを裏付けている。そして、早期産の母親に対する周囲からの援助の重要性を示唆する研究(Minde, *et al.* 1980)を支持するものであった。

育児過程に至っても愛着を示す記述が少ないことについては、1つに経産であるという効果が考えられる。しかしながら、長子出産から7年間も経過していることや、出産過程前半の記述からすると、従来の研究における「初産一経産」の分類からは、初産に近似しているものと思われる。物理的母子分離状態が貢献している可能性も無視できない。しかしながら、ここでも夫との関係性を問題にせざるを得ない。妊産婦の観点からすれば、妊娠が進行すれば、子供が生まれれば、夫もこうしてくれるだろう、ああしてくれるだろう、という期待があったのであろう。それにも拘らず、夫の変化が認められず、不満を増大させていったのではないかと解釈できる。もっとも、夫の側からは、前述した長子と次子との姉妹関係への留意が、行動変容を抑制させたという解釈も成立する。

本事例においては、本論が扱った周産期において、総じて愛着の発達を明確に示す記述が見られなかったが、決して我が子に対して、否定感情を有していた訳ではない。なぜなら、前述の計画妊娠であるという報告や、妊娠後期において、部屋の整理をしたり、ベビー用品を取り揃えたりといった、育児準備が具体的に進行していたことから推察できるからである。更に出産過程前半の記述からも、充分理解できよう。しかしながら、産婦入院中を除いて、明確な肯定感情が見られなかったのも事実である。そしてそのような事実の背後には、常に夫との関係の在り方が問題になっていたと考えられる。本事例が、夫に対して強い依存欲求を有していたという見方もできよう。確かに、親類が近隣に存在していた訳ではないが、多くの友人に囲まれて生活していたことを考慮すると、そのことのみ原因を帰してしまうのも乱暴な議論である。

また、本産婦は、出産後 20~30 分後に我が子との対面を果たしているが、初めて我が子に触れたのは、産後 3 日のことであった。Klaus & Kennell (1976) による、早期の母子接触の臨界期の主張から判断すると、産婦退院後の母子分離と併せて、愛着の発達には不利な条件下にあったことになる。確かにここにも可能性の一端を見い出せよう。一方では、断続的に続く家庭内の問題が、妊出産過程での不利な状況を産出したとも考えられ、その観点からすれば、妊娠・出産・育児の過程を大きく左右しているのは、妊産婦の精神的安定であると結論できる。そしてその精神的安定に影響を及ぼす要因として、妊産婦の身体的な安全だけでなく、社会的環境、とりわけ家族間の人間関係の環境を挙げることができる。

本論は、「妊産婦の我が子への愛着」に焦点を当てたものではあったが、妻の妊娠・出産という事態は、妊産婦同様、夫にとっては父親として同一化する準備期間・実践期間でもあり、家族ダイナミクスという観点からも、妊産婦のみに依拠した研究では不充分である（大日向, 1988）ことを確認したものである。即ち、本事例においては、妻の妊娠・出産に伴って夫にも心理的葛藤が見られ、不適応行動を起こしているとも考えられる。少なくとも本妊産婦の観点からはそうであった。そして、妊産婦にとって重要なのは、実際夫がどのようであるかよりも、自分にとってどのようであるかという認識であろう。その意味でも、妊産婦の目を通して見た夫というのは、「妊産婦の我が子への愛着」といった観点からも、重要な役割を担っていると言える。そのことは、まさに本事例が示している通りである。しかし、妊産婦の精神衛

生上夫の援助が不可欠として、一方向的に夫に問題を背負わせるのは問題解決のための妥当な議論ではない。夫自身の心理的諸問題や実際の行動と、妊産婦のその認知との関係を明らかにしていくことが肝要であると考え（柴原, 1990）。

本研究結果は、冒頭に述べた筆者（1988）の研究結果やその考察を部分的に支持するものであったが、本研究は一事例からの考察に過ぎず、その意味でも一般化できるだけの情報を内包しているわけではない。しかも、本事例は経産婦であり、それだけで潜在因子の介入を許容しているのに加えて、非常に複雑な背景と当時の生活状況を抱えていたのである（表 1 参照）。また、日記情報そのものに対しても検討がなされる必要がある。例えば、胎児に関する情緒的記述は、如何なる条件下の妊婦であってもさほど見られないものかも知れない。また、出産後我が子を目の当たりにしているといえども、「（育児日誌ではなく）日記」のもつ性質上、生活的事象に偏向してしまうものかも知れない。それ故、この記述をもって愛着の一指標として判断するのは早計である。この点の検討は今後の課題であり、更にデータを収集し、慎重に分析していく必要がある。加えて、より長期に渡るデータを対象にすべきでもあろう。しかし、本論が提出した諸問題は、事例の特殊性はあるものの、程度の差こそあれ、如何なる家庭においても発生し得る問題もある。多種多様な条件下で生活する妊産婦の、我が子への愛着未発達の潜在的可能性といった観点から、今後の研究の課題事項として十分に意義を有するものである。最後に、本事例が示した産婦入院中の愛着の発達傾向から、出産過程が、妊娠中の状況に拘らず、我が子への愛着の発達に対して、新たな展開を発生させ得るに足る重要性を有している点を強調しておきたい。

註

- 1) これらのバイアスの回避策としては、既に出産を終えた者が過去に書いていた日記を入手することである。しかし、大局的には観察をも含めた追跡研究が不可能なことや、過去についての回顧的情報を要する場合でも、その信頼性が問題として残る。
- 2) 一瞥してもわかるように、非常に複雑な背景を持った家庭であり、プライバシー保護の点から必要最小限にとどめたい。
- 3) 本データにおいては、他言をはばかるような事象（本事例における経済的問題や性的夫婦関係等）について隠蔽なく語られている点をもって、データの信頼性の一指標とした。
- 4) 世間一般に「心理学」に対して有しているイメー

ジは、実際に心理学が対象としている領域より極小化されたものであろう。故に、“心理学的研究”というインストラクションが、記述内容の偏向を促しているという危惧もある。

- 5) 不安神経症による薬服用であるが、妊娠を契機に発病したのではなく、それ以前からである。また、定期的に服用していた訳ではなく、“不安神経症が遊びにきた”際にもみ服用していた。

引用文献

- Gloger-Tippelt, G. 1986 A process model of pregnancy course. *Human Development*, 26, 134-148.
- 花沢成一 1978 妊娠・育児による母性感情の発達に関する一考察 日本大学人文科学研究科研究紀要, 20, 160-169.
- Minde, K., Marton, P., Manning, D., & Hines, B. 1980 Some determinants of mother-infant interaction in the premature nursery. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 19, 1-21.
- Klaus, M. H., & Kennell, J. H. 1976 *Maternal-infant bonding*. The C. V. Mosby Company
- (竹内徹・柏木哲夫訳 1979 母と子のきずな 医学書院)
- 小嶋秀夫 1986 桑名・柏崎日記に現れた児童発達と家族生活(1) 名古屋大学教育学部紀要, 33, 1-24
- 小嶋秀夫 1988 親となる心の準備 繁多進・大日向雅美(編) 母性 新曜社 所収, 75-96.
- 大日向雅美 1981 母性発達と妊娠に対する心理的な構えとの関連性について 周産期医学, 11, 10, 1531-1537.
- 大日向雅美 1988 母性の研究 川島書店
- 郷久鉦二 1986 妊産婦の心理とその管理 ペリネタルケア夏期増刊号妊産婦の心理 メディカ出版所収, 23-32.
- 柴原宜幸 1988 妊娠後期から産後在院期間にかけての妊産婦の心理的変容—質問紙による縦断的研究—慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要, 28, 115-122.
- 柴原宜幸 1990 夫の行動と妊婦の認知との関連について—事例の日記の分析から— 日本発達心理学会第1回大会発表論文集, 205.
- 上田礼子 1981 母性意識の確立 周産期医学, 11, 9, 1245-1247.